

浄土

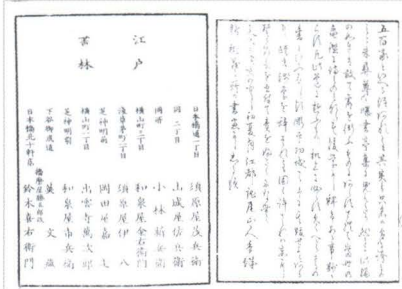
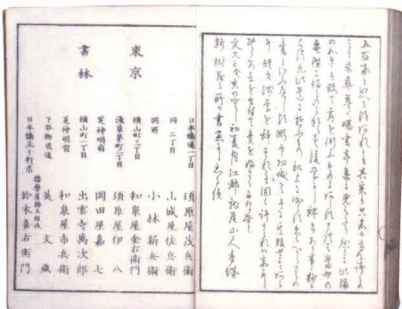
monthly JCDO



貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



上：骨董市で見つけた1878(明治11)年発行の翻刻版の奥付。下：64(元治元)年発行の原本の奥付(酒田市立光丘文庫蔵)

前回この『俳諧文久千三百題』秋・冬を、一八六四(元治元)年の発行と紹介したが、じつはこの本自体は、明治に入って翻刻されたものである。

奥付には「東京書林」とある。江戸が東京と改称されたのは六八(慶応四年九月のことである。とりあえず手許の本を明治版、六四年に発行されたものを江戸版とよぶことにしよう。

千葉県野田市にある、私設の俳句図書館鳴弦文庫の明治期俳書目録によると、明治版は七八(明治十二年)発行とある。十五年後に翻刻されたわけである。発行者は「山梨 内藤伝右衛門」と書かれている。しかし江戸版にも明治版にも、奥付に内藤伝右衛門の名はない。内藤伝右衛門は七二(明治五年)に山梨県で最初

の新聞「こうろく 峡中新聞」(現在の山梨日日新聞の前身)を創刊した人物で、出版事業にもつくしたらしい。したがって明治版を翻刻した可能性はあるかもしれない。また

『芭蕉翁記念館 芭蕉文庫目録 書冊篇』(芭蕉翁顕彰会編/八木書店/二〇〇五年)によれば、たしかに発行者として内藤伝右衛門の名が記載されている。

写真を見てもらえばわかるように、明治版は江戸が東京に変わっているのは江戸版と同じである。

江戸書林について調べてみたがまるでわからない。東京書林については、永井荷風が「古本評判記」(『日本名随筆 別巻12 古書』に収録)ですこし触れている。

「一、そも／＼都下の古本屋に二種あり(略)。一は活字本当世新聞和洋の書籍雑著を主として和本唐本を置かず、他は和本唐本を主となし活版本は僅に古書の翻刻物を売買す。／＼、後者は東京書林組合と云ふものを設け行市世話人を選び春秋折々両国美術倶楽部にて古書珍本現金即売展覧会を開く事已に年あり」

東京書林は翻刻版もふくめ古書の販売を行なう組合ということになる。その前身が江戸書林であったのだろうか。本文部分を見比べると同じである。残されていた版木を使って翻刻したものだろう。私には江戸期から明治期にかけての出版事情の知識はほとんどないから、推測だけで書くしかない。

句についても、前回「暇なときに解説するのも楽しいかもしれない」と書いたが、情けないことにとてもわたしが太刀打ちできるようなくずし字ではない。

山形・天童

三寶寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行



きょうざんこうしやういんさんぼうじ
帰敬山迎接院三寶寺第二十七世
渋谷信一住職。渋谷住職が水を
かけられているのは、昔から本
堂前に湧く湧水池に浮かぶ水面
観音像。そしてこの水が山門脇
の仰徳殿を囲む池まで引かれて
いる。大正七年に三寶寺第二十
三世金沢運瑞住職によって再建
された三寶寺本堂





三寶寺本尊、阿弥陀三尊。
立派な宮殿に祀られている

内陣には落ち着いた荘厳が
施されている





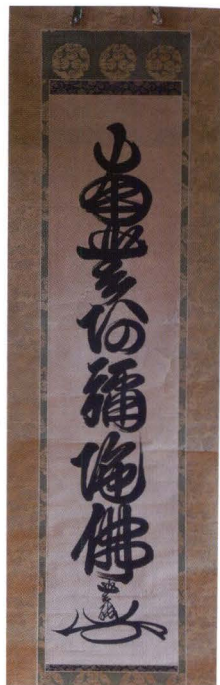
三寶寺寺宝、織田信長公肖像画写真。
木炭を使い西洋画の技法で描かれているが、その画を撮影した現存する
唯一の写真

昭和六年に竣工した仰徳殿。織田藩
主の御霊屋で信長公を始め七十九の
位牌が安置されている。ちなみに信
長公の法号は、摠見院殿贈一品大相
国泰嚴安公大居士

明治三年に舞鶴山に建立された建勲神社。
織田信長公が神として祀られている。戊
辰戦争に翻弄された天童藩にとっては意
味深い社である



十八世紀初頭、奥羽三州を駆け巡り
念仏弘通に専念した無能上人の木像
とその名号。無能上人は三寶寺を拠
点のひとつとしていた



平成十六年、本堂屋根瓦葺き替え等
改修工事の落慶式での渋谷住職。後
ろは長男の祐信副住職。天童市と山
形市は県内では雪が少ないものの特
別な雪対策の施工を本堂の屋根には
施している

浄土

2017/9月号 目次

カラーグラビア=寺院紀行 山形 天童 三寶寺	写真=真山剛	1
連載 私の好きなご法語	柴田哲彦	6
連載 法然上人と親鸞聖人(十三)	林田康順	8
寺院紀行 山形 天童 三寶寺	真山剛	14
連載 響流十方	小村正孝	20
核兵器禁止条約誕生	森 俊英	24
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	33
連載 誌上句会	選者=無縫庵烏鷺坊	34
編集後記		36



表紙題字=中村康隆元浄土門主
表紙写真=鬼海弘雄
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

人の命は食事の時、むせて死する事もあるなり。
南無阿みだ仏とかみて、
南無阿み陀仏とのみ入るべきなり。

『昭法全』四九三頁所載

法然上人は唯一、弥陀の本願を拠り所として、承安五年（一一七五）、一代仏教の中から、いかなる教えよりも勝れ、いかなる人でも修すことができる易行の専修念仏に帰入され、浄土宗を開宗されたのであった。

いかに尊く勝れた教えであっても、その実践が難しければ何の意味もない。上人教示の本願称名念仏は文字どおり、行住坐臥、時処諸縁に関係なく、何時でも、何処でも、何をしても、日常生活の中で仏道実践ができ、そして救われる、画期的な教えであった。

人間の日常生活の基本は、衣食住である。特に食は一日のサイクルで三回廻ってくるころの、もつとも身近な重要な生活行為である。

上記のおことばは、もつとも身近な食事を介して、念仏生活の根本を説く、大切な御法語と申して過言ではないであろう。

人の寿命について釈尊は「人の命は呼吸の間に在るのみ」(『處々經』正藏一七・五二七)と説かれている。説示のごとく一呼吸の後、再び息を吸うことができる保証は何もない。

太平洋戦争が終結して三年後のことであった。横浜の自坊で五重相伝会が開筵された。戦後の混乱期で住職の師父は大変であったようである。

しかし大本山増上寺の椎尾弁匡大僧正にお下りいただき伝灯師、宮林昭彦台下の祖父上、宮林大廉上人を勧誡師としてお招きをして、百数十名の受者も得て、立派に成満することのできたのであった。

その最終日のことであった。受者達が要偈道場の白道を渡り依所に戻ってきた。その中の老婦人が最後の昼食をとっていた時、突然バツタリと前に倒れ、そのまま亡くなってしまったのである。この時のことについては、椎尾大僧正が『正傳法』二輯三七九頁に詳述されている。

爾後七十年たった今日でも、椎尾大僧正と大勢の僧俗が狂おしい程大きな声でお唱えしていられた。あの臨終時の念仏の声は耳底に刻まれ、決して離れることはない。

この御法語を拝する時は、必ずあの五重相伝の一場面が甦ってくるのである。

大本山光明寺法主

柴田哲彦

台下

法然上人 と 親鸞聖人

【連載十三】法然上人が捉えたお浄土②

林田 康順

(大正大学教授)

極楽浄土から思いを運んで

前号では、阿弥陀仏が建立された極楽浄土は、先立たれた方々との再会（俱会一処）が叶う場であることを述べました。かけがえのない大切な方々との死別の悲しさを克服することなど到底できない私達凡夫にとって、俱会一処の教えはこの上なくありがたいものです。そして法然上人は、極楽浄土はこの娑婆世界と隔絶した場ではないことを次の「ふるさとのご詠歌」に託されています。

生まれては　まず思い出ん　ふるさとに　ちぎりし友の　深きまことを

（試詠） 極楽浄土に往生を遂げたならば、まずは思い出そうではないか。この娑婆世界という故郷で「共にお念仏を称えて必ずや浄土往生を遂げよう」と契りを交わした、あの友の深いまことの心を。）

もちろん、極楽浄土からみれば、この娑婆世界はどこまでも迷いの世界に他なりません。その一方、かけがえのない大切な方々との懐かしい思い出を積み重ねた愛しい故郷でもあるのです。法然上人は、そんな故郷に残る大切な方々をお浄土からしっかりと見守りましようと言われているのです。

私が住職を勤めている慶岸寺にはご詠歌講があります。講員の方々はみな「花の台のご詠歌」や『ふるさとのご詠歌』が大好きです」と口々におっしゃいます。さまざまご布教の場でも、これらのお歌の意味を丁寧にお伝えすると、皆さん熱心に耳を傾けて下さり、涙を拭いながら聞いて下さる方も多くいらっしゃいます。誰しも人は、それまでの人生の中で、かけがえのない大切な方々をお送りして、そうした方々への思いを胸に抱きつつ今を生きているお互いです。だからこそ、こうした和歌が詠んでいる深い意味合いを知れば知るほど、先立たれた方々との大切なご縁を思い出して、お念仏の教えの尊さをたいそう喜んでくださるのです。「浄土宗の教えはありがたいなあ」と心から思える瞬間です。

還相回向の尊さ

さらに法然上人は、極楽浄土に往生した後、阿弥陀仏の宮仕えとして娑婆世界に生きるすべての命ある者をお浄土に導く働きに努める〈還相回向〉についてもさまざまに言及されました。ちなみに法然上人は、「いづという姿をとつて」などといった還相回向の具体的様相を詳述されることはありませんでした。いらぬ誤解を恐れて施されなかったのでしょうか。そうした中、ここでは次の二つのご法語を紹介いたしましょう。

浄土に生まれて、さとりをひらきてのち、いそぎこの世界に返りきたりて、神通方便

をもて、結縁の人をも無縁のものをも、ほむるをもそしるをも、みなことごとく浄土へ迎えとらん。『御消息』 昭法全五七六

〔試訳〕 ひと度、極楽浄土に往生してさとりを開いたならば、急いでこの娑婆世界に還り来て、超人的な力である神通力をめぐらせて生前に御縁のあった方もそうでない方も、またお念仏の教えを讃える人も謗る人も、一人残らずお浄土へお導き致しましょう。（う。）

ここで法然上人は、「無縁のもの」と共に「結縁の人をも」と述べられます。もちろん、大乘仏教の教えですから、有縁・無縁みな平等に救われるよう努めるのが本義であることは言うまでもありません。しかし法然上人は、私達の心の弱さをよくご存じで、ご縁のあった方のもとへ還相回向しても構わないのですよ、とお示し下さるのです。

われとはげみて念仏申して、いそぎ極楽へまいりて、五通三明をさとりて、六道四生の衆生を利益し、父母師長の生所をたづねて、心のままに迎えとらんとするべきにて候なり。『往生浄土用心』 昭法全五六〇

〔試訳〕 自らお念仏に励んで、死後は早く極楽浄土へ往生して五通や三明といった超人的な力を体得して、六道四生という迷いの世界に生きる者たちにお念仏の教えを弘め、両親やお世話になった方々の生まれかわったところを訪ねて、思うがままにお浄土にお迎えしようと思うべきです。）

ここでも法然上人は、「六道四生の衆生を利益し」とおっしゃりつつ、「父母師長の生所をたづねて」と述べられます。つまり、あなたのお父さんやお母さん、お世話になった方々の生まれ変わった所へ還相回向しても構わないのですよ、とお示しになるのです。

なるほど、小さなお子さんが不慮の事件や事故に巻き込まれ、あるいは、重い病気を患うなどして、幼くして命を終えてしまったならば、そのお子さんは、「お父さんやお母さんはいったいどうしているだろう、自分がいなくなつて寂しくて、悲しくて、辛くて、泣いてばかりいるのではないだろうか」と、ご両親が心配で心配でいてもたつてもいられないことでしょう。法然上人は、お子さんが抱くであろうそうした思いを汲み取つて、「ご両親のもとに還相回向しても構わないのですよ」と優しく説き示して下さるのです。

もちろん、その逆に、小さなお子さんを遺して旅立ってしまったご両親であれば、「わが子はどうしているだろう」と気が気でならないことでしょう。法然上人は、そうしたご両親の切なる願いもしっかりと受けとめて、そんなご両親に向けて「どうぞお子さんのもとにお還り下さい」と優しく語りかけて下さることでしょう。

このように法然上人は、私達のありのままの思いと阿弥陀仏の大いなる慈悲の御心との両者を汲み取られ、さまざまなお法語を通じて、私達にお示し下さったのです。

宗祖のお言葉を通じて

言うまでもなく法然上人は、ご自身が立教開宗された宗を「浄土宗」と命名されました。まさにその「浄土」とは、これまで縷々述べて来たような俱会一処や還相回向の叶う場に他なりません。大切な方との今生の別れに際して悲嘆にくれる私達凡夫にとって、そうしたお浄土の実在はこの上なくありがたいものです。

今でこそ、浄土宗に限らず、ほとんどの宗派で亡き方に向けた葬儀や法要が広く勤められています。宗内外の檀信徒の方々が、お寺を大事にして下さる最大の理由こそ、僧侶が

心を込めて今は亡き方々の菩提を弔っているからでしょう。そして、多くの檀信徒の方々は、知らず知らずのうちに亡き方々との再会を期し、亡き方々によるお守りを感じているのではないのでしょうか。まさにそうだと思いますこそ俱会一処と還相回向に通じるものです。

そうした点を踏まえて、仏教各宗派の教義を俯瞰した際、宗祖のお言葉を通じて、俱会一処や還相回向の叶うお浄土を正面から説示できるのは、わが浄土宗の教えをおいて他にはありません。法然上人のお言葉が、どれほどありがたいことなのか、どれほど尊いことなのか、浄土宗の教えに連なる私達は、あらためてそのことを学ぶ必要があるでしょう。

速やかなさとりに向けて

このように法然上人は、お念仏を称えた私達が、極楽浄土に往生した時のありさまをわかりやすく丁寧にお伝え下さいました。そして、そんな尊いお浄土だからこそ、私達は心置きなくさとりの道をまっすぐに進むことができますのです。法然上人は次のようにお示しです。

浄土にして阿弥陀如来・観音・勢至に逢い奉りて、もろもろの聖教をも学し、さとりを開くべきなり。『念仏大意』昭法全四〇七

（試訳）極楽浄土では、阿弥陀仏や観音菩薩・勢至菩薩にお目にかかり、さまざまに尊い教えを学んでさとりを開くべきです。）

なるほど極楽浄土では、阿弥陀仏をはじめ、観音菩薩や勢至菩薩といった多くの聖者に見守られながら、心置きなく行を進めて、速やかにさとりを開くことができるのです。

思いわずろう事ぞなし

法然上人は次のように述べられます。

生けらば念仏の功つもり、死なば浄土へまいりなん。とてもかくてもこの身には、思いわずろう事ぞなし。と思ひぬれば死生ともにわずらいなし。（『つねに仰せられける御詞』昭法全四九五）

（試訳） 生きている間はお念仏を称えてその功德が積もり、命尽きたならばお浄土に参らせていただきます。「いずれにしてもこの身にはあれこれと思ひ悩むことなどない」と受けとめたならば、生きるにも死ぬにも思ひ悩むことなどなくなるのです。」

これまで述べてきたように、お念仏を称えて、阿弥陀仏の救いの光明に照らされ、あるいは、お浄土に先立たれた方々から見守られて過す私達の日々は、おだやかな心とやさしい思いで満たされ、阿弥陀仏に誉めていただけるような、先立たれた大切な方に喜んでいただけるような生活態度になつて表れてくることでしょう。そして、その方のおだやかな心とやさしい思いは、周囲の方々にもおのずと広まっていくのです。

以上、浄土宗の教えの基本となる阿弥陀仏（所帰）、選択本願念仏（去行）、極楽浄土（所求）について簡潔に解説してきました。法然上人は、選択本願念仏を称えて、阿弥陀仏の光明に照らされた明るく幸せな日暮らしを送り、最期臨終にあたり阿弥陀仏の来迎にあずかつて必ずや浄土往生を遂げ、そこで速やかにさとりを開くべきことを、終生説き続けたのです。

（続く）

寺院紀行

山形・天童

三寶寺

文・撮影／真山剛



天童藩主 織田宗家廟所 三寶寺の石碑、そして山門の五七の桐の紋が三寶寺の由緒を物語っている

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康。どなたもご存じの三人の戦国武将だが、その息子や子孫についてはどれだけご存じだろうか。

実はこの質問、本稿を書き始める前に多くの方に聞いてみた。徳川家康については息子の秀忠が徳川二代將軍となり、その後も徳川幕府が続いたことは周知の事実。豊臣秀吉も、大坂夏の陣で自害せざるを得なかった息子の秀頼が、これまた歴史上の人物。では、織田信長の息子は？ と何うと、みなさん軽く首をひねって、「織田信長は信長で終わりでしょ」と口を揃える。中にはフィギアスケートの織田信成が子孫？ と言いつつも、信長の息子や織田藩という言葉は出てこない。

かと言う筆者も、たまたま群馬県の甘楽町出身者が経営する企業の社史を編集して、織田信長の二男の信雄のぶかつの名前に出合ったことがあるだけ。

つまり、織田信長は本能寺の変という劇的な幕切れを迎えたことで、その子や子孫がほとんど顧みられてこなかったのだ。

信長に関する質問をもう一つ。

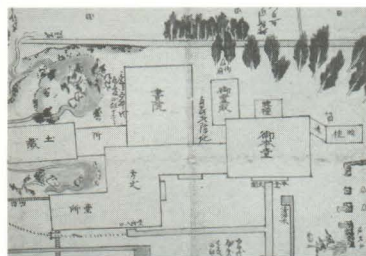
徳川家康は東照大権現となり、ほぼ全国各地にある東照宮に、豊臣秀吉は豊国大明神となり関西を中心に四国や九州にもある豊国神社に祀られている。二人は今でも神として手を合わされている。では、織田信長はいったい神として祀られたのか？ 信長を祀る神社はあるのだろうか？

この二つの難問に答えてくれるのが、今回訪れた山形県天童市の三寶寺さんぼうじである。

三寶寺は織田信長を太祖、信雄を藩祖とする織田家歴代の位牌を祀るお堂、仰徳殿こうとくでんのある織田藩最後の菩提寺なのである。いわゆる御霊屋おなまや（位牌を祀る特別なお堂）である仰徳殿の案内版を読んでみよう。

「織田宗家御廟 仰徳殿」

三寶寺は、文政十三（一八三〇）年、幕府社奉行より織田宗家の菩提寺に申し付けられた。天童織田藩主から、二〇両が下賜され、御霊屋を建立した。慶応四（一八六八）年、戊辰戦争で焼失したが、御位牌



江戸期の三寶寺絵図。当寺は本堂裏に御霊屋があった。その脇の本堂とほぼ同じ広さの書院は織田藩主のためだけのものだったという

は運び出し難をのがれた。

現在の御霊屋は天童養生会（元織田藩士族の会）によって、昭和六（一九三一）年五月に建立されたもので、仰徳殿と称されている。

太祖織田信長公はじめ代々の藩主や家族、七九名の方々の御位牌が安置されている。当時の宣教師が描いたもので、信長公に最も似ていると織田宗家に伝えられた肖像画の写真も掲額されている。

平成十四年六月

天童市教育委員会
天童養生会
鶴正会

続けて、三寶寺から車で5分、舞鶴山まいづるやまの山腹にある建勲神社けんくんしんじやという神社の案内パンフレットを読んでみる。

「織田信長公を祀る天童市舞鶴山 建勲神社」

天童織田藩の歴史は、信長の二男信雄に始まる。（中略）信長の死後、豊臣・徳川の世となるにつれ、織田家は尾張・下野・

大和・上野と国替させられ（中略）上野（現群馬県）小幡から出羽高島に国替された。この時から天童は織田領となるが、次に信美の時、居城（館）を高島から天童（現田鶴町）へ移し天童織田藩となった。

明治維新の際、天童織田藩は官軍に味方した功績で子爵に列せられ、藩祖信長には建勲神の神号を賜り建勲神社として明治三年に日本で最初に舞鶴山に祭られることになった。

なお、信長公を御祭神とした社は、当建勲神社と京都船岡山にある建勲神社の2社のみである。

つまり、織田信長以後も織田藩は取り潰されることなく脈々と続き、廃藩置県を天童で迎え、その時の菩提寺が三寶寺なのである。

帰敬山迎接院三寶寺の第二十七世渋谷信一住職に話を伺った。

「織田藩が天童に移るという話に、私の十代前の辨識住職べんしきが、三寶寺を菩提寺にと働きかけたようです。第十七世辨識上人は当寺の中

多くの織田藩主などの位牌が祀られる仰徳殿だが、中央には信長公の肖像画写真が飾られている



興の祖で、本堂を始め伽藍の建立はもとより、過去帳の整理、寺の財産の調査・確認など、三寶寺は辨識上人なくしては語れない、といっても過言ではない住職の一人です」

歴史的にみると、武将の菩提寺は禅宗系が多い。織田藩も天童に移るまでは臨済宗や曹洞宗といった禅寺を菩提寺にしている。そうした中で浄土宗寺院を菩提寺にしたのは何かしらの理由があったに違いない。もちろん徳川家の菩提寺は浄土宗で、江戸幕府の寺社奉行からの申達書（三寶寺に現存）はスムーズに出されたには違いないが……。

渋谷住職の話を続けよう。

「ここに『浄土宗 三寶寺史』があります。父であり先代でもある享雄住職がまとめた寺史です。先代にしてみるとまだ書き加えたい事があったようですが道半ばで遷化し、一緒に編集をされていた方々から後押しされて私が平成十二年に発行しました」

金で箔押しされた立派な表紙を開き、目次を拝見する。第一章から第九章まで約四百頁、

これほど内容の充実した寺史は見たことがない。その中の第四章が「江戸期の三寶寺」で、一「念仏道場として興隆」

二「中興の祖 辨識上人の活躍」

三「三寶寺が織田宗家の菩提寺となる」

(一) 織田藩主が天童にこられるまで

(二) 天童織田藩の成立

(三) 三寶寺、織田宗家の菩提寺となる

(四) 「五七の桐」が、三寶寺の寺紋に許可される

(五) 信長の肖像（写真）

と、実に詳細な歴史が記されている。

「先代はこの本以外にも浄土宗山形教区の寺院史を発行しています。中興号は伽藍を建てた住職に与えられますが、先代住職は、この寺史を編集したことで中興の祖と言ってもいいかもしれません」

淡々としながらも情熱溢れる口調で、先代住職の足跡を客観的に語られる渋谷住職、自分の寺への貢献は本堂屋根瓦の葺き替えと堀の整備、そして、本堂前の湧水に建てた水面



雪国ならではの大きな位牌堂。かつての書院で、正面奥からさらに左手へと続いている

観音像ぐらいです、と謙遜する。

その渋谷住職が伝えたいのが、織田信長公の肖像画（写真）だという。

先の天童教育委員会が仰徳殿案内版にも記したように、七十九名の位牌が安置されている仰徳殿の祭壇中央に掲げてある織田信長公の肖像画写真、これが三寶寺の寺宝のひとつである。肖像画の詳しい記録は残されていないが、おそらく信長在世中に宣教師が描いたもので、木炭を使った精密な写実画である。一般的に信長の肖像画として有名なのは、狩野元秀が信長の一周忌に描いた、教科書にも載っている画だが、それとは画法が全く異なり、当時のヨーロッパの技法による一枚で、生前だからこそ書く事ができたに違いない。

この肖像画は天童織田藩のお館の奥の間に飾られ、正月に家臣が拝礼していた記録が残っている。その後、廃藩置県に伴いこの肖像画を織田家が東京・麹町に持ち帰る。そして、明治初頭に織田家の家臣の一人が日比谷で写真館を開いたことから、この肖像画を

撮影、全三枚の写真は、一枚が宮内庁、一枚が三寶寺、そして一枚が肖像画とともに織田家の所蔵となった。しかし、戦災で織田家にあつた肖像画と写真は焼失、宮内庁の写真も行方不明、現存するのは三寶寺の一枚だけとなってしまった。

この写真、貴重な織田信長公の肖像画写真として平成四年に文藝春秋社から発行された、遠藤周作著『対談 たかが信長 されど信長』に掲載されたものの、世間にはあまり知られていない。そんなこともあり、より原画に近い形でと、写真のポジフィルムを貸していただけだ。改めて巻頭カラー頁の信長公の写真を見て、表情はもとより、ほかしの手法など鑑賞いただきたい。

さて、天童には大きな寺院が三つある。「めためだて」の若松さまあーの」と歌われる天台宗若松寺、時宗一向派の本山から浄土宗になった佛向寺、そして三寶寺だが、三寶寺は天童にとって特別な寺院である。



天童藩での将棋の駒作りの祖のひとり、河野道助の墓。同じく大岡力次郎の墓もある

天童と言えば将棋の駒で有名だが、それを根付かせたのが天童織田藩であり、駒作りの祖、大岡力次郎と河野道助の兩人が三寶寺に眠っているからである。また、天童広重と呼ばれる版画でない直筆の歌川広重の絵を扱った医師の田野文伸、明治大学創設者のひとりで国会議員としても活躍した宮城浩蔵など、天童を代表する有名人が数多く眠っている。

三寶寺は天正年間に現在地より西の藤内新田に浄土宗名越派として創建、織田藩お館の南に隣接する現在地に移ったが、現在地は天童駅から徒歩約八分。途中のお館跡を過ぎると奇麗な石積みみの塀が続き、五七の桐の紋が際立つ山門となる。山門正面に九間四方の大伽藍、山門ともども赤味を帯びた本堂屋根瓦が印象的だが、この屋根瓦への葺き替えは渋谷住職が工夫した雪対策が施しており、落慶式も行われた大事業だった。山門をくぐるとすぐ右手に仰徳殿。池の中に建てられているが、その水は本堂正面の湧き水が水源。その湧き水池には水面観音像が浮かんでいる。

本堂左手奥には織田藩主専用の書院が、ほぼ本堂と同じ大きさで作られていたが、現在は位牌堂となり、三寶寺を拠点として念仏弘通された無能上人の木像が安置されている。

現在は山形教区の教化団長を務める渋谷住職だが、「思い返すせばあつと言う間」と振り返る。大正大学と同大学院で浄土学を学び、お寺に戻るや三寶寺で発足した吉水講や青年会などの世話役に次々に就任、平成十年に住職となるが、半年後に父であり先代である亨雄前住職が遷化、その遺志を継ぐ寺史出版と五重相伝の開筵、その後も地方の名刹住職ゆえの寺院や地域の各種役職就任、恒例の信長公祭りやお寺の定例行事、加えて伽藍修繕整備。そして、平成二十八年四月五日の大本山増上寺御忌唱導師の大役。まさにあつと言う間という言葉通り。その渋谷住職、今は三寶寺住職として、仰徳殿と信長公の肖像画写真の二つの織田藩の品々をすっかり今に伝えたという想いが強いという。本稿がその一助となれば幸いである。

(ルポライター)



平成二十二年に落慶したのは本堂の屋根、山門の屋根の葺き替え、そして仰徳殿と東塀の改修工事だが、塀も見事な石積みの塀になった

愚者は荒々しいことばを語りながら「自分が勝っているのだ」と考える。しかし、（真理を）識知する人が（謗りを）堪え忍ぶならば、かれにこそ勝利が存する。

（『サンユッタ・ニカーヤ』VII・1・3・6。岩波文庫『悪魔との対話』より）

話し上手、雄弁、弁舌軽やか、弁が立つ……。話すのがうまい人のことを表現する言葉や慣用句はいくつか思いつくが、「聞く側」を讃える言葉となると、寡聞にしてあまり存じ上げない。

ハウツーもの、自己啓発本と呼ばれる書籍群は常に新聞下段の広告をにぎわせているが、そのテ、つまり話し上手の指南書もご多分に漏れずよく見かける。それに比べると、ストレートに「聞き上手」への手引きをうたったものはそれほど多くはないようだ。ビジネスでも日常生活でも、「聞く」ことよりも「話す」ことに比重が置かれているということだろうか。

会話がコミュニケーションの基本たるものであることは、言を俟たない。交渉ごとでも、飲み会の席でも、日常の何気ない場面でも、会話が上手であったほうがスムーズだし、うれしいし、和やかにもなる。人と人との関係性を良好に保つ、または深めるのも、あるいはその真逆の結果を引き寄せるのも、会話が大きなカギを握っていることは、経験上、おそらく誰もがわかっている。

しかし、これがなかなかできない。そもそも、「話し上手」の「上手」がいかなることなのか、定義することが難しい。言葉づかい、トーン、表情、身振り手振り……。たんに、用いる語彙にとどまらない、実は本当の「話し上手」

というのは全身を使つてのものかもしれない。

失敗は無数にある。日々、繰り返し返している。言わなくていいことを、言う。もつと柔らかく表現すればよかった、と思つたときには後の祭り。反対に、「あのとき、はつきり言つておけばよかった」ということもある。

原因はなにか。さまざまあるうが、もしかすると、会話というものが「双方向により成立するもの」という大原則を忘れている可能性がある。「自分が話す」ことにのみ力を注いでしまつてはいないか。たとえ、どれほど正当なことを、理路整然と、力強く訴えても、相手が聞いてくれなければ会話は成立しない。ということとは、「聞く側」も実は、会話を成功させる重要なファクターとなつてゐるはずだ。

少し前の本だが、心療内科医・海原純子氏の著書『こころの格差時代』（角川書店）を読んだ。経済的、社会地位的における、いわゆる「勝ち組」と「負け組」との間でのコミュニケーション不全が蔓延していることを、氏は繰り返し指摘する。「勝ち組」は相手の話を聞こうとしない傾向が強い、という。

だいたい「勝ち組」は「自分の実力、努力のみで」そうなったと思ひ込んでゐるフシが強く、自分よりも下位にあると映る者に、「それは自己責任、努力

不足の報い」とレットルを貼る。おのずと会話は「上から目線」になり、相手を否定しがちとなり、「聞かずに話す」パターンになるという。

そこでの提言が、いわゆる「勝ち組」にある者は、自分が得ている経済力なりの地位なり権力は、けっして自分ひとりの努力のみによるものではないこと、まずそこに気づかなければならないとするもの。もともと、「勝ち組・負け組」の線引き自体が難しいし、自分が「勝ち組」であることを認めるといいうのもどこか自惚れめいている。が、ともかくも、その「気づき」がなければ健全なコミュニケーションはとれないとする。

自分が「勝ち組」に属するのか「負け組」に入っているのか、あまりこだわっても、客観的ボーダーが存在しない以上、さほど意味はないようにも思う。そこに拘泥することなく、他者とかかわりの中でこそ、自己の存在があるというところに各々が「気づくこと」が求められているはずだ。ここに、「互いに聞く」姿勢は促されてくる。聞く姿勢を呈すれば、相手は話そうとする。それを聞く。自分も話す。聞いてもらえる……。

相互に言いつばなしになるやもしれない「何でも言い合える仲」より、「何でも聞き合える仲」のほうが、うん、いいかも。

(小村 正孝)

核兵器禁止条約 誕生

——本年7月7日、人類共存への新しい道が開かれた——

浄土宗 大阪教区 正明寺住職

森 俊英

(ピースプラットホーム事務局)

【鳴り響く拍手】

本年3月27日、ニューヨークの国連本部において藤森俊希氏（72才）が演説した。それは核兵器禁止条約交渉会議のオープニングであり、言わば「特別枠」。各国代表がそれぞれの意見を述べる前に演説する。赤十字国際委員などの4人が順に登壇し、その3番目で

あった。日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の事務局次長である藤森氏は、1歳4ヵ月のとき、母親とともに広島で被爆した。「目と鼻と口だけを出して包帯でぐるぐる巻きにされ、やがて死を迎えると見られていました。その私が奇跡的に生き延び、国連で核兵器廃絶を訴える。被爆者の使命を感じます」と述べ、核兵器の非人道性と禁止条約の必要

性を懸命に訴えた。帰国後、東京で行われた報告会で「演説を終えると、議場から拍手が鳴り響きました」と、感慨深く藤森氏は国連での様子を述懐した。

【感慨深さの意味】

この「議場から拍手が鳴り響く」は深い意味を持つ。日本被団協は1956年に結成され、多くの活動を行い、国連に何度も被爆者を派遣してきた。長きにわたる不屈の活動の連続である。しかし、ある時期まで、国際社会は被爆者の声に大きな関心を寄せてはこなかった。

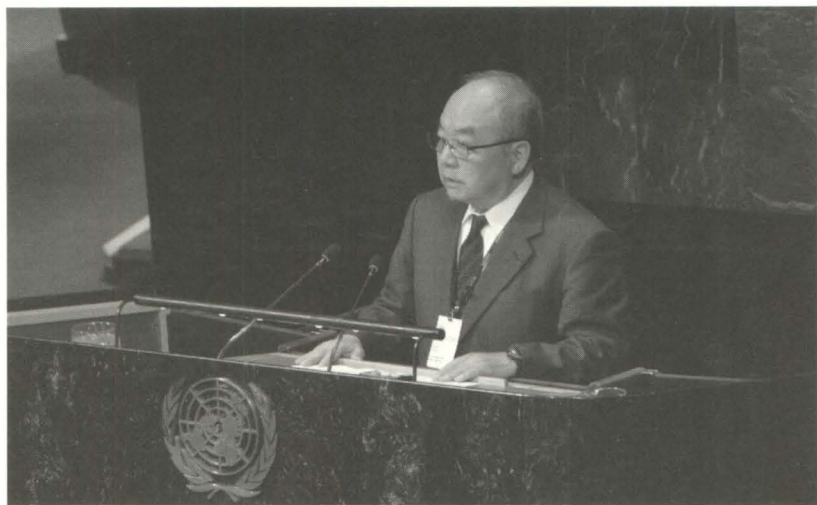
たとえば、今から12年前（2005年）、核兵器不拡散条約（NPT）再検討会議が国連本部の本会議場であり、そのときも被爆者は、当時の秋葉広島市長・伊藤長崎市長らとともにニューヨークまで足を運んでいた。そして、議場で核兵器廃絶を訴えている。ただ、そのことを伝える新聞記事（注1）の題名は

（注1）朝日新聞 2005年5月6日夕刊18面

「被爆地訴え届かず 昼食時間帯、席ガラガラ」とある。つまり、公式日程ではなく、各国の代表者たちが昼食へと次々に退席していくなかで、両市長と被爆者は演説していたのだ。演説後に拍手はあったものの、それは、傍聴席で聴いていた同行の被爆者やNGOメンバーらの拍手であった。

もう12年を経ていることなので、その場にいた被爆者も、今となれば「私も、そこに居ましたよ」と、苦笑いの表情で私たちに話してくれる。しかし当時は、いかに無念であり、情けない思いで議場を見渡しておられたのであろうか。

被爆者は、国際舞台におけるそうした苦難にもめげず、海外にまで足を運び、諦めずに今日まで語り続けてきた。つまり、本年3月27日の演説は、過去の多くの被爆者による長年の訴えの延長線上にあり、ゆえに、演説した藤森氏は、その苦労を噛みしめるようにして、「議場から拍手が鳴り響きました」と、



本年3月27日、国連総会議場で始まった核兵器禁止条約の交渉で演説する藤森俊希氏
(写真提供：日本被団協)

その感慨深さを表現されたのである。

【議長からの要望】

上述の核兵器禁止条約交渉会議で議長を務めたのは、エレン・ホワイト氏（コスタリカ在ジュネーブ国際機関政府代表部大使）。3月末の会議後、禁止条約制定に向けて前向きで意欲的なコメントを出し、引き続き次の会議の準備に奔走していた。4月には長崎を訪ね、「条約交渉に関わる政府代表が被爆者の声に耳を傾けることは、会議を動かす強い原動力になっている」と、報道機関のインタビューで語っている。

藤森氏は先の報告会で、「ホワイ特議長からは、次の会議には多くの被爆者を連れてきてください。そして、もっとたくさんさんの署名を持ってきてください」と頼まれました」と。つまり、被爆者の声を聴こうと強く願っているのは、他でもない議長のホワイ特氏なのである。被爆者の長年の努力は、ようやくこの

域に辿り着いた。

【ヒバクシャ国際署名】

ホワイ特議長の要望に「もっとたくさん人の署名を」とあるが、それは、昨年4月から始まった「ヒバクシャ国際署名」(注2)を指す。平均年齢が80歳を超えたヒロシマ・ナガサキの被爆者が国際署名を始め、その活動を多くの団体や個人がサポートしている。2020年までに数億人の署名を集めることを目指し、集まった署名は、核兵器禁止条約が議論されている国連総会に毎年届けるという壮大なプロジェクトだ。

同プロジェクトには、署名活動が盛り上がるように、いろいろなシステムが構築されている。インターネットを使った情報拡散と署名はもちろん、団体として協力する場合は、定期的に開催される推進連絡会に席をおき、情報交換や協働が行われるようになっていく。つまり、このプロジェクトの本体は「キャ

(注2) ヒバクシャ国際署名 ウェブサイト <http://hibakusha-appeal.net/index.html>

(注3) 5月29日、増上寺会館にて。推進連絡会・ピースプラットホームの共催

ンペーン」であり、誰もが署名を行えるとともに、キャンペーンの拡張に参加できるよう工夫がある。ゆえに、2020年までキャンペーンとしての署名活動は、成長しながら継続されていく流れがあるということ。

昨年の秋には、56万4千筆の署名が国連に届けられた。今年もすでに多くの署名が集まり続けている。ホワイ特議長は、この署名を指して「もっとたくさん持ってきてください」と、要望してくれたわけである(本年6月に累計296万4千筆を提出)。

この「ヒバクシャ国際署名」の推進連絡会代表は田中熙巳^{てるみ}氏。本年5月まで日本被団協の事務局長でもあった。ちなみに、日本被団協の事務所は港区芝大門のビル内。浄土宗大本山増上寺の、ごく近くというご縁にある。本年5月末に、増上寺内の一室で「ヒバクシャ国際署名」の説明会(注3)が開催されたが、田中氏はその席に事務所から歩いてお越しくださり、「今度の署名を、確実に核兵器をな

くす運動にするため、世界中に訴えていきたい」と力強く参加者に協力を求めた。

【潮目が変わった2010年】

現在の国連を舞台とした被爆者の躍動を報告してきたが、被爆者の声と活動が、このように国際社会から注目されたのは、今から7年ほど前の出来事が契機となっている。拙稿の2節目で「ある時期まで、国際社会は被爆者の声に大きな関心を寄せてはこなかった」と記したのは、その境目を意味する。

2010年4月、赤十字国際委員会（ICRC）が「核兵器の時代に終止符を」との総裁声明を発表した。ICRCは、政治的問題に関しては慎重な立場をとるのが常であったが、このときは踏み込んだ表現を用い、「核兵器のいかなる使用も国際人道法に合致するとみなすことは不可能である」と。この内容は、非常に重要なものである。それまでに一部の人々にあった「状況によっては使用され

うる」という見解を完全に切り捨てたのである。

さらに、広島・長崎での原爆投下直後には多くの人が救援に入り、その人たちが被曝した。原爆による放射線の恐ろしさが未知であったゆえの悲劇である。しかし、現代は、核兵器から放出される放射線はその後人命を危険にさらすことが十分に分かっている。その現実からICRCは「核兵器が使用された場所に、自分たちや医療団は救援に行くことすらできない。だから、絶対に使用してはならない」と明言したのであった。

この声明が、国際社会の動きに大きな影響を与えたと言つて過言ではない。その後、非核保有国の動きが活発化する。2013年に、ノルウェーが「核兵器の人道的影響に関する国際会議」を開催、2014年には、メキシコが同会議の第2回目を開催した。冒頭で紹介した藤森氏は、「メキシコでの会議でも、私は被爆者として演説しました。このころか

ら、国際社会が被爆者の声を熱心に聴いてくれるようになったように思います」と教えてくれた。さらに、同会議の3回目は同2014年末にオーストリアで開催されている。

【保有国の参加があろうがなからうが】

ところで、核兵器を無くすという目標は、実は1960年代後半から、すでに国際社会にはあった。核兵器不拡散条約（NPT）がそれであり、保有国に核軍縮を義務付けている。しかし、アメリカ・ロシアをはじめとする保有国のエゴで核軍縮は進まず、40年以上の年月が過ぎ去ってしまった。すなわち、核軍縮のハンドルは保有国の意中にあったのである。

それに業を煮やした核兵器を持たない国々（非保有国）が、ついに立ち上がることになる。2010年7月、広島での144カ国・4069の自治体からなる平和首長会議でのこと。カナダの元国會議員ダグラス・ローチが、

「機は熟した」という趣旨の発言をした。それは「核兵器を禁止すべきである。その条約によって核兵器を違法とすることを、保有国の参加があろうがなからうが進めなければならない」を意味する。それまで、誰も公言しなかった彼の主張は、核廃絶の活動家たちに熱狂的な支持をもって迎えられることとなる。このように2010年から、国際社会の核兵器をめぐる潮流は大きく変わった。

【核兵器禁止条約の交渉開始と誕生】

人道上の観点から核兵器の禁止と廃絶を求める声がさらに高まり、2017年、いよいよ禁止条約の交渉が開始されることになった。冒頭に報告した3月末の会議はその第1会期にあたり、第2会期は6月15日～7月7日に開催。禁止条約制定への動きは想像を超える勢いで進み、この第2会期において、きつと採択されるであろうと、関係者の間では事前から評判になるほどであった。7月7日、

ニューヨークの国連本部で122カ国の賛成をもつて、人道的見地から核兵器の存在を否定する条約が、ついに誕生した。

ところで、この交渉会議には保有国の姿はない。「保有国が加わらない条約など意味がない」という反駁であろう。しかし、そうした主張には、もはや説得力がない。先に書いたように、保有国は40年以上も前から「廃絶する」と約束しながらそれを怠り、実際には、保有継続と兵器の精度向上に余念がない。そうしたことは、保有国が核兵器に費やす今後の予算を視れば明らかな事実となっている。

また、今回の条約に意味がないと主張するのであれば、放っておけばよいのであるが、保有国は反駁を続けている。あたかも、国際社会に禁止条約が浮上することにより、保有国自身がなんらかのダメージを受けることを今から心配しているかのように。

【禁止条約の意味】

ここで、禁止条約には2つの大きな前例があることを報告しておきたい。1つ目は1990年代の対人地雷禁止条約、2つ目は2000年代のクラスター爆弾禁止条約である。いずれも、アメリカ、ロシアなどの大国は参加していない。ところが、大国が入らずとも、多くの有志国が取り組み、これらの兵器に「悪」という法的な烙印を押せば、その効果は明確に顕れている。すなわち、いずれも兵器の数が減少し続けているとともに、非加盟の大国もその流れに協力するようになり、被害者の救済に貢献までしている。

補足だが、対人地雷禁止条約について、日本政府は当初、反対の立場をとっていた。それはアメリカとの関係を意識してのこと。しかし、日本国内での市民レベルのキャンペーンなどが広がるようになると、日本政府はアメリカの指示を退けて推進する立場をとるよ

うになり、国際的にも大きな影響を与えている。

さて、核兵器禁止条約から期待される効果は、このように幾つも列記することができるが、拙稿では「投融資」という視点を挙げておきたい。今回の核兵器禁止条約においては、「使用、開発、実験……」などを幅広く禁止しているが、併せて、それらに対する援助も禁止している。

ところで、核兵器を開発・製造をしている企業に、投融資をしている金融機関が世界には多く存在している。私たちがよく知っている国内の金融機関や大手銀行のいくつかも、悲しいことにその行為を行っている。そうした事實は、ときどき、新聞に小さな記事で銀行名などが公表されている程度であったが、禁止条約が採択された今後は、その報道が多くなるとなるようになるであろう。それに呼応して、核兵器廃絶を求める市民・企業・法人などが、自身の預金を他の健全な

金融機関へと移すなどして、金融機関の社会性を問う動きも起こり得るのである。

核兵器は、今までは道徳に反する存在であったが、今は法律に反するものとなった。私たちは銀行などを利便性で選びがちだが、今後は社会的責任も考えて選ぶことになる。

【新しい道が開かれた】

禁止条約によって、すぐさま核兵器が消えるわけではない。想像ができないほどの苦難があることは分かっている。しかし、今までのように核兵器を非合法化せず、「持つことが特権」という認識であるならば、国家間における核兵器の拡散と精度向上は止まることを知らない。そして、やがては戦争を待たずして、偶発的衝突・事故などにより人類の未来には経験したことのない悲劇しか待っていないことになる。私たちはこうした悲観論を超えて、いかに険しくとも希望のある未来を希求すべきである。

今回の禁止条約は、核兵器に対して、「必

要悪」ではなく「絶対悪」というレッテルを貼り付けた。日本政府は現在のところ、アメリカを意識して禁止条約には見向きもしていないが、過去の対人地雷禁止条約のときにように、推進へと態度をあらためてくれることを期待したい。そして、そのような導きは、市民・草の根レベルからの声によるのである。これからは、市民レベルのキャンペーンなども数多く企画されるであろう。私たち仏教者によるイベントの開催、あるいは個々の団体によるイベントへの参加、会場の提供、資金の助成など、奉仕すべきことはいくつもある（下段参照）。

核兵器禁止条約は被爆者の長きにわたる悲願であり、それが本年、国連の場で結実した。なお、この禁止条約は9月20日から各国の署名手続きが始まり、批准国が50カ国に達した後、90日を経て発効される。

人類共存のため、新しい道が開かれた。そ

のことに仏教者は敏感でありたい。

【これから、具体的に】

「比叡山宗教サミット30周年記念の集い」（8月3・4日開催）においても、核兵器廃絶への決意が共有された。これからは、その方向性に沿った宗教者個々の実際の努力、さらには宗教間の連帯が望まれることとなる。

拙稿をお読みいただき、具体的活動への協力に関心をお持ちいただける方は、ピースプラットホーム（p.platform2014@gmail.com）へお問い合わせをいただけると有難い。

世間では、核兵器禁止条約が締結されたことへの認知度は、まだまだ高いとは言えない。そこで、市民レベルにおいて関心を高めてもらうべきポスターの製作や、イベントの企画、活動のための基金について、一緒に考えていただける方は、ぜひご連絡を。

143

かい日

さっちゃんね

かまちよろう



浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●家

〔特選〕紫陽花の雨の家路となりにけり

野上由香子

駅を出れば細かい雨。傘を差してもよいが、
いつそ軽く濡れてもいいと思うぐらいに美し
く、左右に紫陽花が咲き誇っている。一日の用
事をおえて一杯やったりして家路につく何のこ
ともない日常の行爲を楽しんでいるのである。

〔佳作〕夕映えの岩場に蟹の家族かな

実はその家主はわたし墓蛙

青時雨墓へ家紋を確かめに

歌代 那美

山井 悠輔

有藤 昌造

●康

〔特選〕小康を得ては羽蟻となる男

小橋 逸朗

長く持病とつきあっているのだろう。それ
でも少しは体調良好な日もある。家族の心配
をよそに少し羽根を伸ばしたくなるのである。
羽蟻となつてちよつと浮かれて。医者に内緒
で一杯呑む。しかられますぞ。

選者 = 無縫庵烏鷺坊

〔佳作〕家康という鯉鈍屋の竹落葉

飯田 保

客がみな海月に見える不健康

横山美子

康さんは船尾の人でアロハシヤツ

安西由紀男

●自由題

〔特選〕

小宴やほのぼの並ぶ冷奴

谷

満

卓に並ぶ冷奴。実に地味だが酒には欠かさない。小宴でもないのかもしれない。居酒屋のカウンターにひとり。周囲の人にも冷奴が並ぶ。それを小宴と名づけてみたのである。今夜も酒が旨い。

〔佳作〕葛蒲湯を終へた葛蒲として積まる

伊藤 富生

佃煮は浅蜷と決めて豆御飯

片上 鍊二

白日傘風土記の丘へふたつみつ

松井 瑤子

浄土誌上句会のお知らせ
兼題

自由土題

締切・二〇一七年十月二十五日 発表・『浄土』二〇一七年十二月号
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。 ●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内月刊『浄土』誌上句会係

編集後記

雲隠れいつものことだと秋の月 岱潤

埼玉大病院に精神科医の大西秀樹氏が二〇〇七年より『遺族外来』というものを開設されているそうだ。愛する人を亡くした人は「第二の患者」で、うつ病になるケースが通常の十倍にもなるそうだ。NHKの朝のニュース番組で紹介していたが、何とも違和感を感じずにはいられなかった。

当然うつ病と診断されれば、抗うつ剤が出されるわけで、うつ病患者が増えるだけという感じがする。遺族を見守る話に何故宗教が絡まないのか、この国は全く不思議な国になってしまった。先日テ

レホン相談で、五十代の女性から真剣に「人間死んだ後はどうなるのですか？」というストレートな電話があった。聴けば最近ご主人と父親を続けて亡くされ、悲しみと孤独に押しつぶされそうになっていらした。浄土宗の信仰はこうしたときとでも有り難く、お浄土や来迎の話をしたところ、最後にはとても元氣な明るい声で「ありがとうございます」を言って頂けた。

お浄土の「話」は、死と直面する人ほどその価値が高まるようだ。最近六道輪廻を仏教の教えだなどと言い、死んだら生前の行いで地獄や餓鬼道に堕ちるなどと言っては、お布施の額をつり上げてい

る僧侶もいるらしい。お寺がもつともつと遺族に寄り添い、遺族の心のケアをして行けば、精神科医が薬を出す遺族など少なくなると思うのだが。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十三巻九月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十九年八月二十日

発行 平成二十九年九月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了悟

印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四丁目四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三七八)六九四七
FAX 〇三(三三七八)七〇三六
振替 〇〇一八〇、八、八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光園寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない

※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

浄土宗の日常勤行式が
写経になった!! 写経後は
オリジナルの経本
にもなります。



薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の
皆様へ

写詠歌 セット

宗歌「月かげ」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう!

当会オリジナル新商品!!

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。